

判断し、本井戸の計画に資料を提供する。
以上の測定結果について詳細に述べる。

28. 樹枝状構造と国土計画要旨

高知県岡窪室 岡 本 但 夫

（要旨）

私は昭和22、23年度土木学会論文集文集以来数回にわたり樹枝状構造理論について同誌に投稿したが、此度は右理論の国土計画への応用の可能性についての研究を述べたいと思う。

樹枝状構造理論は次の二条件を基礎として出発する。

① 集れば集る程単位要素当抵抗が減ずる（大きくなる程割安になる）

② 総抵抗を最少限にする（全体として最も経済的にする）

与えられた地域内に等布するもの（要素）を以上の二条件を満足し外へ販出す。（又は外から来たものを地域内に均分する）場合に得らるべきルートが樹枝状構造に外ならない。

樹枝状構造というのはその形が樹木の形をしているから付けた名前である。

施設面においては樹枝状になっている各駅幹支線の分岐点と幹支線の交点の性質についての研究を発表してきた。

今国土計画を顧るにその終局目標とする所は産業交通、河川等の面についてみな以上の二条件を満足する具体的構図を照き出す事にならず、この吳樹枝状構造理論の目的に完全に一致する。

すなわち樹枝状構造理論は国土計画の目標とすべき最終の形を図示している事になる。

しかるに現実には社会で行われる企画は水と同様その時の最急勾配の方向に向いて進められる傾向をもち、その方向は必ずしも前記樹枝状理論の示す最終形の方角と一致するとは限らない。

よって日常の企画を常に最終方向を見定めた後に行わす必要がある。

然らざる限り計画は結局一種のメタステースル状態に固結して終局最善の形に致らぬ場合があり得る。

そこで樹枝状構造と日常企画との間の調整の問題がある。